

Ikuyo
Nakamichi Road
to
2027

仲道郁代
ピアノ・リサイタル
ドビュッシーの見たもの



PROGRAM

ドビュッシー：前奏曲集 第1巻

1. デルフォイの踊り手
2. 帆
3. 野を渡る風
4. 音と香りは夕暮れの大气に漂う
5. アナカプリの丘
6. 雪の上の足跡
7. 西風の見たもの
8. 亜麻色の髪の乙女
9. とだえたセレナード
10. 沈める寺
11. パックの踊り
12. ミンストレル

ドビュッシー：映像 第1集

1. 水に映る影
2. ラモーを讃えて
3. 運動

ドビュッシー：映像 第2集

1. 葉末を渡る鐘
2. そして月は廃寺に沈む
3. 金色の魚

ドビュッシー：喜びの島

使用楽器：ヤマハコンサートグランドピアノ CFX

ドビュッシーの見たもの

音は空気に溶けている

音の分子は空気の形を造りだす

音の分子の連なりは、光を生み、躍動する

現在、過去、未来も自在に越えさせてくれる

ドビュッシーの見たもの

変化自在な具象と抽象

変化自在な現実と幻想

それらが音のプリズムになって香りたつ

その音のプリズムに溶けてみたい

仲道郁代

プロフィール

日本音楽コンクール第1位、ジュネーヴ国際音楽コンクール最高位、エリザベート王妃国際音楽コンクール入賞ほか国内外で受賞暦多数。これまで日本の主要オーケストラと共演するほか、バーヴォ・ヤルヴィ指揮ドイツ・カンマーフィルをはじめとする海外オーケストラとの共演も数多い。CD録音ではレコード・アカデミー賞受賞CDを含む「仲道郁代ベートーヴェン集成 ～ピアノ・ソナタ&協奏曲全集」ほか、古楽器での録音でも高い評価を得ている。2018年に「仲道郁代 Road to 2027 プロジェクト」を開始。ベートーヴェン没後200周年と自身の演奏活動40周年が重なる2027年に向けて10年にわたり、ベートーヴェンを核に据えた「春」のシリーズ、ピアノズムの新境地に挑む「秋」のシリーズを好評のうちに展開している（本公演は後者のシリーズの第3回にあたる）。著書に『ピアニストはおもしろい』（春秋社刊）など。一般社団法人音楽がヒラク未来代表理事、一般財団法人地域創造理事、桐朋学園大学教授、大阪音楽大学特任教授。仲道郁代オフィシャル・ホームページ <http://www.ikuyo-nakamichi.com>

前奏曲集 第1巻 (1909-10)

《前奏曲集》は、ドビュッシーのピアノ作品が到達した一つの境地です。ここには12の題材から切り取られた情景が、ものの気配までも映すほどに極められたピアノズムによって見事に描かれています。

1. **デルフォイの踊り手**（ゆっくりと荘重に）
古代ギリシャ、パルナッソス山麓のデルフォイにアポロン神殿があり、巫女がそこで神託を伝えたとされます。その儀式的踊りでしょうか。この優雅な舞いは、アポロンの威厳と気高さにみちています。

2. **帆**（適度な速さで）
原題の“Voiles”は「帆」のほかに「ヴェール」の意味にもなります。いずれにしても風になびくような捉えどころのなさが、無限へ広がるかのような全音音階で表現されています。

3. **野を渡る風**（生き生きと）
「野を渡る風はそのそよぎを止める」というファヴァールの詩の一節に由来するようです。「できるだけ軽い」動きと下行する平行和音による優しいそよぎは、中間部の激しい和音によって一瞬止まります。

4. **音と香りは夕暮れの大気に漂う**（適度な速さで）
タイトルは、ボードレールの詩「夕暮の諧調」の一行から来ています。詩は、視覚・聴覚・嗅覚が渾然一体となって夕暮れのめくるめく一瞬を捉えようとするもので、それは作曲家を魅了する瞬間でもありました。

5. **アナカプリの丘**（きわめて適度な速さで）
アナカプリはカプリ島にある町でしょうか。南国の強烈な太陽のもとでタランテッラ舞踊と民謡風の楽句と、時にはハバネラ風のしどけなさとは交錯します。

6. **雪の上の足跡**（悲しげにゆっくりと）
光り輝く前曲から一変して雪景色となります。2度音程で動く一貫した短長リズムは、「悲しく凍てついたこの景色の背景」となっています。

7. **西風を見たもの**（熾烈に激しく動いて）
海を渡ってくる激しい西風が、嬰へのバス音上でハ音と衝突しながら渦巻くアルペッジョや2度音程の軋る響きの中で荒れ狂いながら通り抜けていきます。

8. **亜麻色の髪乙女**（とても静かに優しく表情豊かに）
一転して穏やかなこの前奏曲は、作曲家が歌曲にもしたルコント・ド・リルの詩が発想源です。7度音程間を上下に揺れ動く無伴奏の旋律が優しさを湛え、そこからくる五音音階の響きは詩の舞台スコットランドを想わせます。

9. **とだえたセレナード**（活発すぎずに）
フラメンコの音階とコブラ風のメリスマなどを織り交ぜながら、スペインの夕暮の情景が描かれます。ギター風に始まるセレナードは、物音や人影によって邪魔されて最後まで歌い切れません。あきらめて遠ざかっていきます。

10. **沈める寺**（とても静かに）
4～5世紀頃海に沈んだブルターニュの町イスが霧の立ち込める朝に浮かび上がるという伝説に基づいています。オルガナム風の楽句にのって大聖堂が現われ、修道士たちの悲しげな聖歌が聞こえてきます。全貌を現わしたかと思うまもなく、大聖堂は再び揺れる波間に沈んでいきます。

11. **パックの踊り**（気まぐれにそして軽く）
シェイクスピアの『真夏の夜の夢』に出てくるいたずらな小妖精パックが素早い付点リズムに合わせて縦横無尽に空中旋回する様子です。時折聞こえるのはオベロンの角笛でしょうか。

12. **ミントレル**（適度な速さで）
ミントレルとは、一説には黒人音楽ショーを演じる白人一座のこととされます。跳躍下行する装飾音とスタッカート音が、とぼけてぎくしゃく動く彼らの様子を伝えています。

映像 第1集 (1901-05)

この曲集は、古典組曲の形式と新しい語法の融合を実現させたものといえましょう。

1. **水に映る影**（きわめてアンダンティーノで）
冒頭の連続和音、2つのテーマ、半音階や五音音階の響き、推進力を生むリズムの工夫などを駆使して、縦横無尽な水の様態が描かれています。最後には遠くで響く寺院の鐘を聞きながら水の輪が消えていきます。

2. **ラモーを讀えて**（ゆっくりと荘重に）
量感のある豪華なサラバンドです。最初の旋法的なユニゾン旋律、持続低音上を広範な音域で動く充実した並行和音、躍動的なシンコペーション・リズムなどが、作曲家のフランス古典音楽への賛美を表現しています。

3. **運動**（生き生きと）
これは実質的にはトッカータといえます。動きのわずかな変化が次の動きを誘い出し、しだいに大きな波となって拡大していきます。中間部では新しい歌も浮かび上がりますが、最後にこの運動エネルギーは空中に雲散霧消します。

喜びの島 (1903-04)

1904年の夏にドビュッシーは、2番目の妻となる女性とジャージー島へ愛の逃避行を敢行します。この時作曲中だったのがなんとも象徴的なタイトルを持つこの作品です。トリルが分散増3和音のカデンツァ楽句を誘発し、イ長調の音階第4音を半音上げた旋法的な旋律が付点音符と3連符のリズムで無窮動の踊りを始めます。



映像 第2集 (1907)

ここではドビュッシーのピアノズムがさらに先鋭化し、いっそう微細な事象に対応できるように3段譜が使われています。

1. **葉末を渡る鐘**（ゆっくりと）
11月1日の万聖節から翌日の死者ミサのときまで、村々の甲鐘が黄色く色づいた夕暮の森に鳴り渡る情景とされます。全音音階がつくる葉のしげみの中を「虹色のもや」が立ち込めたあと、澄んだカリヨンの音がそっと、しかしはっきりと響き渡っていきます。

2. **そして月は廃寺に沈む**（ゆっくりと）
東洋びいきの友人とともに作曲家が夢見ていた架空の風景のようです。4度・5度音程と3和音の各平行和音、そして五音音階の東洋的な旋律が、最強音がPというごくひそやかな筆致で不思議な情景を描き出します。

3. **金色の魚**（生き生きと）
日本の黒漆のパネルに描かれた2尾の金色の魚が靈感源とされます。ドビュッシーの想像力は絵の印象をはるかに超えて、彼自身がそこで光、水、色彩、そして不意のしなやかな動きと戯れているかのようです。

そして中間部で官能的な大きなうねりへと発展したあと最初の楽句が戻ってきますが、しだいに既出の要素が総動員されて歓喜の乱舞が繰り広げられます。この強烈な輝きと肯定的な幸福感は作曲家にしては異例で、とても高度なテクニックを要求する曲になっています。

対談 ドビュッシーの見たもの

Ikuyo
Nakamichi
Road
to
2027

仲道郁代 × 松橋麻利

聞きて・構成：長井進之介

ベートーヴェン没後200周年と仲道郁代の演奏活動40周年が重なる2027年に向けて展開中のコンサートシリーズ、「Road to 2027」。春はベートーヴェンを軸にしたプログラム、そして秋は、様々な作曲家の作品と共に、ピアノという楽器だからこそ可能な表現を模索するプログラムが並ぶ。今回はオール・ドビュッシー・プログラム。意外にもすべてをドビュッシーでまとめたリサイタルは仲道にとって初の試みとなる。そこで今回、ドビュッシーに対する仲道の想いを、ドビュッシー研究の第一人者である松橋麻利との対談を通して語って頂いた。

仲道さんが特に大切にしてきた作曲家であるベートーヴェンと、今回取り上げるドビュッシーの音楽、両者にはどのような違いを感じていますか？

仲道 まずメンタリティが正反対なのだと思います。ベートーヴェンは論理的に、モチーフを組み立てて音楽を構築しています。ドビュッシーはその真逆で、モチーフや、形式で構築するということを否定する立場にいる人だと思います。

松橋 そう、展開がないんですよね。ドビュッシーはモチーフを変容はさせますが、有機的に展開はさせていません。

仲道 例えば、ベートーヴェンのピアノ・ソナタでは曲が進行して、展開

部があり、その後に再現部に達したときに音楽の不可逆性を感じるというような、時間軸を感じる。そのこと自体がドラマを作っていると思うのですが、ドビュッシーにはそれが感じられません。時間の存在の仕方が、ドビュッシーの場合は全く異なりますね。

松橋 時間軸がない訳ではなく、様々な事象が同時に起こっているのですよね。例えば、彼の円熟した作品の中には“遠くで”という指示がたくさんあります。“いま”ここで起こっていることと、別のところで起こっていることが同時に発生している。ですから一本通った時間軸では展開していかないのです。ソナタ形式では、全く同じではないけれど、似たような形で提示されたものが

戻ってきますよね。これは時間を“閉じる”ような作業です。ドビュッシーはそれを拒否して、提示部にあったものを回想するなど断片的に見せていく形をとったりしています。

仲道 例えば《ベルガマスク組曲》の〈月の光〉の冒頭の形が最後に再現されるときに、冒頭にはなかった“ドレ”の音が印象的に響きます。これを聴くたびに、それまで見ていたものが実は違う世界のものだったというような、あたかもパラレルワールドが存在していたのかと、2つの時間軸の存在すら感じさせる気がします。これは松橋先生が仰る時間の感覚と近いのではと思います。ほかにもドビュッシーを演奏していて感じる不思議な感覚があります。いま自分がどこに立っているのかわから

なくなるという奇妙さを感じるのです。今回演奏する《映像 第2集》の〈葉末を渡る鐘〉、《前奏曲集 第1巻》の〈音と香りは夕暮れの大气に漂う〉などを弾いていると、上下左右や東西南北がわからなくなってきます。

松橋 ドビュッシーの想像力は本当に自由に飛んでいってしまうのでそういうことはよくあると思います。また、調の問題もあるかもしれませんが。基本的にロマン派までは曲の主調が明確にあって、帰る場所がはっきりとしている。しかしドビュッシーにはそれがない……というか、わざとそれをなくしているのです。例えば、〈葉末を渡る鐘〉は全音音階で書かれています、最後はト短調の主和音で終わります。そういった調にとらわれない自由さも、仲道さんのおっしゃるような、自分がどこに立っているかわからない感覚を生み出しているのかもしれない。

仲道 近い時代を生きたサン＝サーンスやフォーレ、あとはラヴェルなどの作曲家にはそういう感覚はないですし、ドビュッシーのこうしたスタイルを受け継いだ作曲家もいますよね。非常に特異だなと……。

松橋 あまりにも個性的すぎるのでしょう。同じことをしても意味がないし、あの領域にまで到達できない。彼は音楽を音の想像力で書いています。色々と詩的なタイトルをつけてはいますが、それは詩を曲にしたということではなくて、きっかけとしてあるもので、あくまでも音の想像力で構成している。そして詩的なものと音を一致させる感覚が非常に鋭い。これはドビュッシー以外では考えられない。

仲道 詩的なものを五感へと、そして五感から音という詩的なものへと置き換えていますね。彼はおそらく音に香りも感じていたのではないのでしょうか。彼の感覚では、例えば寒い・暑い・柔らかい・硬いといった皮膚感覚や、光、色、見るもの、聞こえるもの、全てが粒子として分解されて捉えられているように思います。曲にするときも、ものを描写するのではなくて、そのものの本質、そのものを作り上げている粒子の本質を捉えて音にして浮かび上がらせているような気がします。見たものが音の空気として浮かび上がるのか、はたまた、見たこともないけれども、感覚の世界で感じることでできる何か、幻影のようなものが音になっていくのか。感覚の狭間への入り口が開く……そんな気がします。

ドビュッシーの音楽の特徴や独自性が浮かび上がってきましたが、これほどまでに特別な音楽を書いた彼はどこから影響を受けたのでしょうか。

松橋 ドビュッシーは象徴主義文学から大きな影響を受けていると思います。ドビュッシーとほぼ同時期の詩人にはポール・ヴェルレーヌやステファヌ・マラルメ、アルテュール・ランボーなどがいます。ドビュッシーはヴェルレーヌを好んで取り上げて歌曲を書いています、すべての感覚に訴えるという点ではシャルル・ボードレールの詩に影響を受けています。例えば「万物照応」という詩があります。これは、「自然が人間の様子を静かに見つめている象徴の森では、五感すべてが呼応しあい、人の感覚を高揚させる」という詩です。なかには「香りは子どもの肌のようにさわやかでオーボエのように

対談 ドビュッシーの見たもの

Ikuyo
Nakamichi
Road
to
2027

やさしく」という行もあります。香りによって感触が誘発され、嗅覚が聴覚も刺激する、五感すべてが一体となって人の感覚の内なるものを高揚させるという内容です。

仲道 いまのお話を伺っていて、ぜひお聴きしたいことがでてきました。ヴェルレーヌは「定かなもの」と「定かならざるもの」が混ざり合う灰色の歌に優るものはないと言っていますよね。

松橋 はい。ヴェルレーヌは「詩法」という詩の中で、鮮明な色彩ではなくそこはかとないニュアンスを求めるといふ、象徴主義の詩作の美学をうたっています。

仲道 ドビュッシーの音楽のある種の曖昧さもまさにその「灰色の歌」につながると思うのですが、この灰色というのは、印象派の画家の作品にも通じるのではないのでしょうか。彼らの作品は濁らせない鮮やかな原色を集めて、灰色……というのか曖昧な色を創り出しているように思うのです。例えば、ルノワールの肌色も混ぜ合わせて作った肌の色を使っているのではなく、鮮やかな色彩の集まりによって、あの滑らかな、柔らかな質感の肌が作り出されていますよね。それと同じで、ドビュッシーの音楽の「灰色」の感じも、鮮やかな色が粒子で混ざり合っていてできているような感覚があります。

では、今度はピアノリズムについても伺いたと思います。かつては、ドビュッシーの作品はやわらかいタッチで、ぼんやりとした音色で弾く、という流れがありましたよね。それは彼の創り出す世界とは相反するものに





なってしまうと思います。ヴェルレーヌのいう「灰色の歌」を音楽で示すためには、むしろタッチは明瞭さが必要だと思うのですが……。

仲道 その通りだと思います。実際にドビュッシーの作品の楽譜を見ると、強弱やスタッカートにテヌートなど、指示が非常に緻密に書き込まれています(左の図版参照。〈水に映る影〉の自筆譜)。それこそモネの「睡蓮」のように、近くで見ると、筆の跡が見えて何が描いてあるのかわからないけれど、遠くから見るとあの独特の世界観が立体的に浮かび上がる、ということと似ている気がします。もし、一つ一つの音をぼんやりと弾いてしまったら、ドビュッシーの音楽の本質は浮かび上がらないのではないのでしょうか。ドビュッシーはピアノという楽器を知り尽くしていると思います。ピアノが出すことのできるありとあらゆるサウンド、それを実現するタッチを知り尽くしている。絵画で例えるとしたら、多種多様な技法と色のパレットを持っていたというような……。

松橋 そうですね、一つ一つのディティールは非常に鮮やかに捉えつつ、総合として聴かなければなりませんね。いま仲道さんが仰ったことを表しているのが《映像 第2集》の自筆譜なのです。ドビュッシーは様々な指示を色分けして書いていて、自筆譜を出版社に渡すとき、青いインクで書いてある指示は必ずその位置を守るようにと言っています。それをしたのはこの曲集がはじめてなのです。

仲道 なるほど。細かなニュアンスが非常に緻密に書かれていますね。

ドビュッシーの作品は、聴いてみると自由で何ものにもとらわれない、“広い”感じさえ受けますが、楽譜を見ると決して自由ではないですね。

松橋 そうですね。楽譜の通りに演奏して、その結果は自由に受け取ってください、ということなのです。

仲道 演奏者が“なんとなく”で弾いてしまったら、ドビュッシーの品格も感性の細やかさも表現できませんね。これほど考えられているからこそ、すべてを粒子のように捉えて音として表現することが可能なのでしょう。

これまで、ドビュッシーの音楽の特徴や感性の細やかさ、影響などについて語っていただきましたが、ぜひ今回のリサイタルのテーマ、「ドビュッシーの見たもの」に込めた想いを伺いたいと思います。

仲道 ドビュッシーは目で見たものだけではなく、心の目で見ようとしたもの、更には幻想の中で見たものまでも、粒子単位で描いているのだと思います。実際にはないものを音にしたとき、そこにあるかのように立ち昇るもの、見る、聴く、という感覚のその先にあるものは何なのだろう……ということを探求したいという想いからこのテーマを設定しました。

松橋 ドビュッシーのその感覚は、とても日本人の感覚に通じるものがあります。実は、蒔絵の中に留守模様という、登場人物をわざと描かず、その人の持っている物やその人を暗示する風景などを描いて物語を想像させるという手法があります。人物を一切描かずに気配を描くところは、ドビュッシーの音楽と非常に似

ていますか？ だからこそ多くの日本人がドビュッシーの音楽に惹かれるのではないかと思います。

仲道 面白いですね。こういう感覚は、西洋にはあまりないものなのでしょうか？

松橋 ほとんどないと思います。もっと直接的に登場人物や彼らの想いを描いているはずです。

仲道 確かに、「いない人への想いがここにある」ということを描くことはあっても、“いない風情”が描かれることはないですね。

松橋 ないものの風情に注目したのもそうですが、音楽で空間を描くことを意識したのもおそらくドビュッシーがはじめてでしょう。そこにはなくても、すぐそこにあるように感じさせる。空間の使い方が非常に巧みです。これもまた日本人が理解しやすい美意識だと思います。

仲道 自然の捉え方で言えば、目の前に見えているのは草木であったとしても、その向こう側を想像させる、というようなところがありますね。今回のプログラムでも、見えないものにまで思いを馳せることによって見えてくるものを大事にしたいという気持ちがあります。

最後にぜひ、コロナ禍の中で準備を重ねてこられたこのリサイタルに対する想いをお伺いしたいと思うのですが。

仲道 コロナ禍に襲われた最初の頃、世の中を覆う不安の中で、ベートーヴェンに向かうのは苦しく思うこともありました。でもその中にあっても

ドビュッシーを弾くということは、心がすごく楽だったのです。楽というのは、ドビュッシーは何かを“課す”というところがないからかもしれません。感覚を細やかにして彼の音楽に浸ることは“課す”こととは全く別次元の話です。ショパンでは同調して辛くなったりするし、シューマンは弾いていて涙が出て心が揺さぶられますが、ドビュッシーはそれらと全く別の感覚です。この時期にドビュッシーの音楽を演奏できたことは本当によかったと思っています。

松橋 ドビュッシーは弾きながら聴くことに徹することができる、というのも大きいかもしれませんね。それにドビュッシーは徹底して「自分」を作品の中に出さない、自我を関わらせないということもあります。だから苦しくないのかもしれない。

仲道 確かに、仰る通りだと思います。ベートーヴェンやショパンやシューマンは辛さや苦しみが作曲の原動力になっているところがありますから、音にすると、一緒になって救いを求めないと弾けないのです。でも、ドビュッシーは、そこには

何のわだかまりもない。自分の感覚を研ぎ澄ませていくことが全てで、一音が始まった瞬間に身を浸せるかどうか。といったところがあります。

松橋 よくわかる気がします。演奏家のそういう感想は貴重ですね。

仲道 コロナ禍の中で、音楽は動詞として存在するのだと気が付きました。音楽を奏でる、受け止めるという行為によって、成り立っているものなのだと。それがどれだけ尊いことなのかを思いました。音楽が何を伝え、人と人との間に何を生かしているのか。ベートーヴェンですと私も「皆さんも一緒に行こうではないか!」という心持ちになりますが、ドビュッシーはもっと自由です。心のままに音の中に溶けていけるように思うのです。その感覚は、現実と幻想の狭間でもあり、五感を通してのみ感じられる“存在とは何か”というような不思議な気持ちになります。ドビュッシーの音の空気の連なりに身を浸したときに湧き起こる感興の世界、そんな時間と空間をコンサートではお過ごしいただけたらと思います。

松橋麻利 [まつはし・まり]

東京藝術大学大学院音楽学修士課程修了。専門はドビュッシーを中心とした19～20世紀前半のフランス音楽。著書に『ドビュッシー』(音楽之友社)、共訳書



にジャンケレヴィッチ著『ドビュッシー生と死の音楽』(青土社)など。楽曲解説に児玉桃(水戸芸術館主催)、中井正子らのドビュッシー・シリーズがあり、N響定期公演の解説も多数。「ドビュッシーフェスティバル」(カワイ主催)、シンポジウム「芸術照応の魅惑」(日仏会館主催)などで講演。獨協大学講師。

長井進之介 [ながい・しんのすけ]

国立音楽大学大学院修士課程器楽専攻(伴奏)修了、同大学院博士後期課程音楽学領域単位取得満期退学。在学中、カールスルーエ音楽大学に交換留学。



ピアニスト、音楽ライターの活動を並行して行っている。『音楽の友』や『ぶらあぼ』など複数の音楽媒体でレギュラー執筆を担当し、インターネットラジオ番組「OTTAVA Fresca」(毎週木・金曜日9:00～12:00)プレゼンターを担当。著書に『OHASHI いい音をいつまでも』(三省堂書店)などがある。

仲道郁代 Road to 2027 リサイタル・シリーズ



仲道郁代がベートーヴェン没後200年と自身の演奏活動40周年が重なる2027年に向けて企画した、10年間に及ぶコンサートシリーズです。
仲道本人が構想した全20回の各プログラムから成り、
ベートーヴェンを核とした[春のシリーズ]と
ピアノズムの新境地に挑む[秋のシリーズ]の
2本の柱で展開されています。

春のシリーズ SPRING SERIES

ベートーヴェンのピアノ・ソナタを核に据えて、
ベートーヴェンの以前・以後のピアノ作品とともに
各回のテーマに迫ります。
主に大ホールで上演されるシリーズです。

「ベートーヴェンは
ピアノ・ソナタの中で、
生きることは、
死ぬことは、
神はいるのか、といった
人間が抱く永遠の問いに
向き合っています。
私はそのことを
ベートーヴェンの
演奏を通して
問いたいのです」



パッションと理性	悲哀の力	音楽における十字架	幻想曲の系譜	知の泉	劇場の世界	夢は何処へ	高雅な踊り	音楽の哲学	生と死の揺らぎ
モーツァルト:ピアノ・ソナタ K.310 ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第23番「熱情」 Op.57 ブラームス:ピアノ・ソナタ第3番 Op.5	ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」 Op.13 ブラームス: 8つのピアノ小品 Op.76 シューベルト:ピアノ・ソナタ第19番 D958	ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第22番 Op.54 ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第21番「ワルトシュタイン」 Op.53 ショパン: 2つのノクターン Op.48 シューマン: ピアノ・ソナタ第3番 Op.14	モーツァルト: 幻想曲 K.475 シューマン: 幻想曲 Op.17 ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第28番 Op.101 シューベルト:さすらい人幻想曲 D760 Op.15	ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第17番「テンペスト」 Op.31-2 ショパン: バラード第1番 Op.23 リスト: ダンテを読んで S.161-7 ムソルグスキー: 組曲「展覧会の絵」	ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第19番 Op.49-1 ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第20番 Op.49-2 ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第18番 Op.31-3 シューマン: パビヨン Op.2 シューマン: 謝肉祭 Op.9	ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第27番 Op.90 ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第13番 Op.27-1 ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第14番「月光」 Op.27-2 シューベルト: ピアノ・ソナタ第18番「幻想」 D894 Op.78	ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第24番「テレゼ」 Op.78 ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第25番 Op.79 ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第26番「告别」 Op.81a リスト:メフィスト・ワルツ第1番「村の居酒屋での踊り」 S.514 ラヴェル: 優雅で感傷的なワルツ ショパン:ワルツ「告别」 Op.69-1 ショパン:ワルツ Op.64-2 ショパン:ポロネーズ第6番「英雄」 Op.53	ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第30番 Op.109 ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第31番 Op.110 シェーンベルク: 6つの小さなピアノ曲 Op.19 ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第32番 Op.111	ショパン: ピアノ・ソナタ第2番「葬送」 Op.35 ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第29番「ハンマークラヴィア」 Op.106
春のシリーズ 2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027
秋のシリーズ									
ショパン~プレイエルの響き~ ショパン:バラード第1番 Op.23 ショパン:バラード第2番 Op.38 ショパン:バラード第3番 Op.47 ショパン:バラード第4番 Op.52 ショパン:24の前奏曲 Op.28	シューマンの夢 シューマン:アレグロ Op.8 シューマン: 幻想小曲集 Op.12 シューマン: 予言の鳥 Op.82-7 シューマン: ピアノ・ソナタ第1番 Op.11	ドビュッシーの見たもの ドビュッシー: 前奏曲集 第1巻 ドビュッシー: 映像 第1集 ドビュッシー: 映像 第2集 ドビュッシー: 喜びの島	幻想とは ブラームス: 2つのラプソディ Op.79より第1番 シューマン: クライスレリアーナ Op.16 ショパン: 幻想曲 Op.49 スクリャービン: 12のエチュード Op.8より 第1番、第12番 スクリャービン: 幻想曲 Op.28	前奏曲 ドビュッシー: 前奏曲集 第2巻 ラフマニノフ: 前奏曲「鐘」 Op.3-2 ラフマニノフ: 前奏曲集 Op.23より 第2番、第5番、第7番 ラフマニノフ: 前奏曲集 Op.32より 第2番、第5番、第8番、 第10番、第11番、第12番	ブラームスの想念 ブラームス: 7つの幻想曲 Op.116 ブラームス: 3つの間奏曲 Op.117 ブラームス: 6つの小品 Op.118 ブラームス: 4つの小品 Op.119	シューベルトの心の花 シューベルト: 4つの即興曲 D899 Op.90 シューベルト: 4つの即興曲 D935 Op.142	ラヴェルの狂気 ラヴェル: 鏡 ラヴェル: 水の戯れ ラヴェル: 夜のガスパール	組曲 グリーグ: 組曲「ホルベアの時代より」 Op.40 バッハ:パルティータ第2番 BWV826 バッハ:イタリア協奏曲 BWV971 バッハ:パルティータ第1番 BWV825 ラヴェル:クープランの墓	変奏曲を極める モーツァルト:フランスの歌「ああ、お母さん眠いて」による12の変奏曲(きらきら星変奏曲) K.265 シューマン:アベック変奏曲 Op.1 ラフマニノフ: コレリリの主題による変奏曲 Op.42 ベートーヴェン: 創作主題による32の変奏曲 WoO.80 ブラームス: ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ Op.24
※2018年4月30日 サントリーホール	※2019年5月26日 サントリーホール	※2020年5月17日 サントリーホール→ 2028年3月に延期(場所未定)	※2021年5月30日 サントリーホール						
※2018年10月27日 東京文化会館小ホール	※2019年10月27日 東京文化会館小ホール		※2021年10月23日 東京文化会館小ホール						

秋のシリーズ AUTUMN SERIES

ピアノズムを追求するシリーズ。
主に小ホールでの上演をメインにしており、
より限定された空間でピアノ表現の
多様さ、細やかさを味わって頂きます。

「ピアニストは
常に個々の作曲家が求める
ピアノズムに向き合います。
そのピアノズムがもたらす
豊かさや細やかさを
多角的に追求するのが、
秋のシリーズです」



写真：池上直哉

優れた製品は、常に最高のパフォーマンスを奏でる。

ユニオンツールはオフィシャルスポンサーとして、音楽活動を全面的に応援しています。

「優れた製品を供給し社会に貢献する」

ユニオンツールは、このフィロソフィーを昭和35年の創業から守り続けています。

人と技術と地球を結ぶ



ユニオン ツール株式会社

<http://www.uniontool.co.jp>



好評発売中

ベートーヴェン生誕250年記念リリース
仲道郁代が辿る、深遠かつ多様なベートーヴェンの音世界
**仲道郁代ベートーヴェン集成
ピアノ・ソナタ&協奏曲全集**
パーヴォ・ヤルヴィ(指揮) ドイツ・カンマーフィルハーモニー・ブレーメン

完全生産限定17枚組 ¥18,000+税
SICC 39032-48

CD12枚+ハイブリッドディスク3枚+DVD2枚

DISC 1~12(BSCD2) ピアノ・ソナタ第1番~第32番他
DISC 13~15(ハイブリッドディスク) ピアノ協奏曲第1番~第5番・ピアノと管弦楽のためのロンド
DISC 16・17(DVD) 第5番「皇帝」・第3番・ドキュメンタリー「メイキング・オブ・ピアノ・コンチェルト」
【録音】2003年3月~2006年3月 彩の国さいたま芸術劇場、音楽ホール(ソナタ)2004年6月、バート・キッシンゲンおよび2006年7月、ベルリン(協奏曲)

仲道郁代の「ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全集」全タイトル配信中！



アラバスク〜
ドビュッシー・ソロ・ピアノ作品集

【収録曲】
ベルガマスク組曲/2つのアラバスク/
子供の唄分/旅画/喜びの島
CD: BVCC-766 定価 ¥2,718+税

公演曲収録



Sony Music Labels Inc.

食で、音楽で、心豊かに。

素晴らしい音楽は、人生に彩りを添え、心を満たします。

私たちハウス食品グループは、大切な人と笑顔で語らう

素敵な食の時間をお届けしたい。

そして、おいしさで心を豊かにしたい。

人と笑顔をつなぐ、皆さまのグッドパートナーを目指して。



Plate: RAYNAUD
エルキューイ・レイノー 青山店 Tel.03-3797-0911

食でつなぐ、人と笑顔を。

 *House* ハウス食品グループ

仲道郁代ピアノ・リサイタル「ドビュッシーの見たもの」
2020年10月25日(日) 開演14:00/18:00 東京文化会館

主催：ジャパン・アーツ

協賛： *House* ハウス食品グループ

協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル/ヤマハミュージックジャパン

発行：有限会社オフィス・ナカミチ
デザイン：三木和彦/株式会社アンバサンドワークス
編集：北川由子/有限会社オフィス・ナカミチ
表紙写真：久間昌史
制作：ジャパン・アーツ